
愛廉　　アイレン

茶都良ミケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛廉 アイレン

【Zコード】

Z4569Z

【作者名】

茶都良ミケ

【あらすじ】

慣れない援助交際で飛び込んだ優等生・愛依。

「五万でだめなら……十万！」

割つて入り、強引に彼女を連れ出したさえない草食系大学生・連。複雑な家庭の事情と身体の秘密を抱える愛依と一晩過ごした連。翌日、彼女を家に帰すが、彼女の家にはパートナーが来ていた。

「お母さん、お義父さんを刺しちゃった……」

孤独になつた愛依の為には何でもすると決意した連は……。

著作権は茶都良ミケにあります。

HP『茶都良ミケ*拙作文庫』などで掲載する場合もあります。
<http://nek02.net/yamatocat/>

あらすじや本文を隨時書き換える場合があります。

一、愛依

序章 援交

一、

「五万円！ 出しますから、えっとお……その……」

何なのだらう、この人。勝手に息巻いて割り入ったくせに、おどおどして。

年は私より少し上っぽい。大学生、かな。

「僕が、この子を買います！…」

「おい、何だよ！ 僕が先に話をつけたんだぞ。後から出てくるなよ」

私に三万円の『お小遣い』をくれる事になつて、いたネイビースーツのサラリーマンが怒鳴つた。

(ネットオーネットショーンみたいね)

競り落とされる当人が、他人ごとを見ている感覚だつた。

夜の繁華街は、沢山の無関心な人々が歩いている。

いや、本当はちら見するだけの好きな目が渦巻いている。すぐに逸らして行き過ぎるけれど。

(早く決めてよ)

誰でも構わない。『あいつ』以外の知らない男なら、みんな同じ。

「五万でだめなら……十万！ ねえ君、十万円でどう？」

ばあか。オーネットショーンてね、こうこう落札する」とヒートアップする初心者には危険なんだよ。

第一、払えるの？ だけど……。

「じめんね、おじさん。私、十万円のお兄さんについて行く」とこするわ」

何故だか私は、この必死なバカにハンマーを下ろした。

「ケツ！ たかが一回のHONK-OKEに十万つて。頭イカレちゃつてんじゃねえの」

「……行こう」「

強引に私の腕をひっぱる掌が、軽く汗ばんでいた。
こういう事　援助交際　に、慣れていないのだろう。お互い様
だけど。

一、

ラブホテルにチョックイン。

最近はファッショントルとか、カップルズホテルとか呼ぶらしいけれど。

彼氏もいなくて機会に恵まれなかつた私には、オーソドックスな呼び名が一番しつくりくる気がする。

意外に可愛いお部屋。壁紙が花柄だ。テレビとベッドが異様に大きい。

(ラブホテルでこうなら、一流ホテルのスイートルームってどんなのだろう?)

生来、貧乏性の私には想像もつかない。

ゴージャスさに圧倒され、ただ呆気にとられた。

「あの、さ」

振り返ると援交のお兄さんが、ばつが悪そうに頭を搔いていた。

「なあに?」

「あの……さ」

それはもう聞き飽きた。

「実は……」

お兄さんは徐に財布を開いた。取り出した札束は……六千円。

「ごめん! 見栄はつたけど、これしか無いんだ」

今どき、土下座。

「ホテル代、ぎりぎり。だから君をこんな所に連れてくる資格も無いし……」

「十万どころか……千円だって払えない。本当にごめん……」

「あつははは」

大体そんな事だつと。分かつていた。久々にお腹を抱えて笑つた。

「仕方ないなあ。ねえ。ワリカンで此処に泊まらない？」

宿泊代はサービス料・税込みで一万一千円と書いてあった。

こんな大それた行動をしているのに、冷静な自分に改めて驚いた。

「駄目だよ！ 親御さんが心配するよ…」

お兄さんは田を白黒して叫んだ。なんとまあ、期待を裏切らない

反応。

素人女 それも女子高生 を買おうとしている男だとは思えない。

生真面目というか、『うぶ』というか……。

あのサラリーマンに手馴れた『取引』を持ち掛けられた時は、身体が硬直した。

「無理な愛想も要らないし、ついてきてじっとしてるだけで三万円。

アルバイトより簡単だろ」

覚悟を決めた後、私はただ感情を殺していた。
だけど今は不思議な気分。楽しい、といつぱんらしくている。

「帰ろう。送るから、家どこ？」

私は首を横に振った。

「帰りたくない。……と言いつより、帰ると死ぬかも」

「えっ？！ あのう……」

またもや、お兄さんは周章狼狽。そして黙りこんだ。暫く、沈黙の時間が過ぎる。

「……そつか。事情があるんだね」

ようやく重い口が開かれた。

この空気を払拭したくて、私はベッドでトランポリンみたいにバウンドした。

「ねえねえ、お兄さん。ラブホテルって、ただ性交するだけの場所じゃないんだね。

映画リストとかゲームとか、色々置いてる。へえ、食事も無料なんだあ」

高級ベッドのスプリングは、予想以上によく弾む。

「ぶつ。性交つて……」

笑顔が可愛いくて、もつと見たくなつた。

男の人をそういう風に思つたのは初めてかもしない。

「お兄さんはこういう所、よく来るの？」

「……よく、つて事はないけど。何度かは」

なんだあ。清い身体じゃないんだ。ちょっと残念。

……つて、どうしてよ？ 变なの。

……自分が一応『真っさら』だからそう思つのかな。

「ねえ、お兄さん。『何か』……する？」

この人なら優しく『抱いて』くれそうな気がする。
穢れたい、と思っていた自分の気持ちが、何か変わつてきていた。

ぎゅっと田を閉じた。

三、廉

「じゃ、映画でも観る？」

今の僕は完全に『草食系男子』の部類にカテゴライズされているだろう。

可愛くて若い女の子が誘つてくるところに。

「え……？」

拍子抜けした表情で、彼女がベッドから起き上がった。

（お金なら要らないよ。無いのは分かつてゐるし）

彼女の目が語つていた。それは分かつてゐる。

「あ、もしかしてお腹空いてる？ 食事、頼もうか。何が良い？」

小さく「任せゆ」と呟く彼女。震えが少し収まつていたことに、僕はホッとした。

内線『九』をダイヤルすると、背中に温もりを感じた。柔らかい

…。

「あ、えっと……。ハンバーグプレート……とクラブサンドセットを、お願ひします」

どきどきする。本音は今すぐきつく抱きかえして、押し倒したい。受話器を下ろして向き直ると、彼女が僕の胸に埋まつた。

心臓の音がばれそうで、気まずい。

「私、あんまり映画観たことが無いの。おすすめとか、教えてくれる？」

…残念。彼女の身体が僕から離れた。

「ああ。どういうのが好き？ アクションとか、サスペンスとか、恋愛ものとか……」

「それも、おすすまで」

主体性の無い子にも見えないが、まだ多少緊張しているのだろうか。先ずはアメリカのホラーものをセレクトした。

ステイー・ブン・キング原作の『一四〇八号室』。

『キャーッ、いやつ、怖い！』なんて可愛い声を上げて抱きついてくる、なんて。

ちょっとしたスケベ心を抱きつつ。

僕たちはラブソフナーに並んで座った。

こんな場所なのに、なぜかお互いぎこちなくなる。

（どうしてラブソフナーって言つのだろうか。くつついで座るからだろうか？）

ラブホテルも直訳すれば 恋宿。だけど恋人同士で来るとは限らない場所だなあ。

そんなどうでも良い事を考えながら彼女の横顔を見た。

可愛いなあ。画面に釘付け。息を呑み、強張った表情。そつと手を重ねてみた。

すると彼女の掌が開き、握り返してきた。

嬉しくなった。初々しい自分が照れくさいけれど、とにかく嬉しかった。

ラブホに男女が一人いて、関係を持たないのは逆に不健全かもしれない。

だけど僕はセックスするよりも心地良かつた。肌の摩擦よりも温かい。

次は恋愛ものの日本映画を観た。

さつきの映画ではかなり怖がっていたし、口直しは女の子が好きそうな甘いものの方が良いだろう。

ストーリーは純愛もの。

主人公の男の子が心臓病で、主治医の娘である幼馴染みの女の子と恋愛する話だ。

これを選んだ時、彼女の顔色が変わった気がした。

だけど本人が観たいというのでそのまま選んだ。

「……ぐすっ。切なすぎるけど、良い話だったね」

「本当……だね」

彼女につられてか、僕も久々に泣いた。

その後、順番にお風呂に入つて（もちろん裸はおろか下着姿だつて見ていない）、ベッドに入った。

下にパジャマとTシャツを着ているのは分かつていても、バスローブ姿がなまめかしかつた。

「……やっぱり、僕はソファーに行こつか？」

「一緒に居てよ。……腕枕して」

はつきり言つて、拷問だ。だつたら手を出してしまえば良いのに。だけどそう出来なかつた。

「お兄さん、不思議な人だね。連れ込んでおいて、抱かないの？」

「ははは。連れ込む、つて……」

彼女は時々、女子高生とは思えない古めかしい言い回しをする。それがドキッとする。

妖怪人間に出てくる主人公みたいだ。本当に不死身で年を取らなかつたりして。

一応医学を勉強している身なので、本気でそんな事を信じている訳ではないが。

「私、魅力無い？ 援助……交際なんかしようとしていたような子だよ。

それがタダで良いつて言つてるんだから、男としては『据え膳喰わぬは』って状況でしょ」

……もういちいちツツ『M』を入れるのはやめておこう。真剣に言つているようだし。

「正直に言つて良い？」

緊迫した面持ちで彼女が肯いた。やっぱり思つた通り。生真面目で純粋な子だ。

「本音は抱きたいよ。僕は男だし、君はすぐ可愛いいし。

だけど、無理してるように見えたから。顔、蒼ざめてたし」

彼女が頬を押さえて俯いた。

「あ、でも助けたとかじやなくて。金で女の子を買つ社会人が羨ましくて邪魔したかったのかも。

あ、援助交際したって意味じやなくて。

僕、医大生なんだけど、別に親が医者とかじやなくて。上京して一人暮らしだし、毎日の生活もカツカツで……

格好悪い。一人で意味不明にべらべら喋つている。

くすくすつ、と彼女が唇に両手を当てて笑う。更にあどけない表情になつた。

制服は共学の進学校だけど、お嬢様育ちらしき雰囲気を受ける。

「ねえ、お兄さん」

「僕、葉川廉^{はがわ れん}つて言うんだ」

いい加減、『お兄さん』を連発されると悪い事をしている気がする。

「私は橘愛依^{たちばな あい}。『愛』に依存の『依』つて書く、変な名前」

「愛依ちゃんか、良い名前だ。『依』つて頼られるつて意味も有るんだよ」

愛依で良いよ、と言う彼女に対し、僕も呼び捨てで良いと返した。それからは他愛もない話を繰り返した。そのうちに愛依は自然に寝息を立てていた。

本当は疲れきつていたようだ。

(何が遭つたんだろうか)

実は以前から僕は愛依を知っていた。

駅前のちょっとおしゃれなカフェ。彼女はそこでバイトしていた。清楚で可愛い子だな、つてずっと思つていた。大学や合コンでは知り合えないタイプだ。

だからといって、どうこうなりたいなんて思つてはいなかつたけれど。

一度しつかり者の彼女が食器を落として割つた。男の客が彼女の手を握つたのが原因だつた。

「申し訳御座いません！」を繰り返す彼女に、男はしつこく絡んでいた。

見かねて助けたのは、別の客だった。僕は……ただ躊躇していた間の出来事だった。

(本当は男が苦手なんじゃないかな)

髪を撫でながら、僕は愛依の寝顔を見ていた。この位は役得だろう。

愛依の髪は染められていない。ストレートロングで、日本人形よりも艶々した黒髪だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4569z/>

愛廉 アイレン

2011年12月21日21時50分発行